

## II 遺構

### 1 調査区の設定

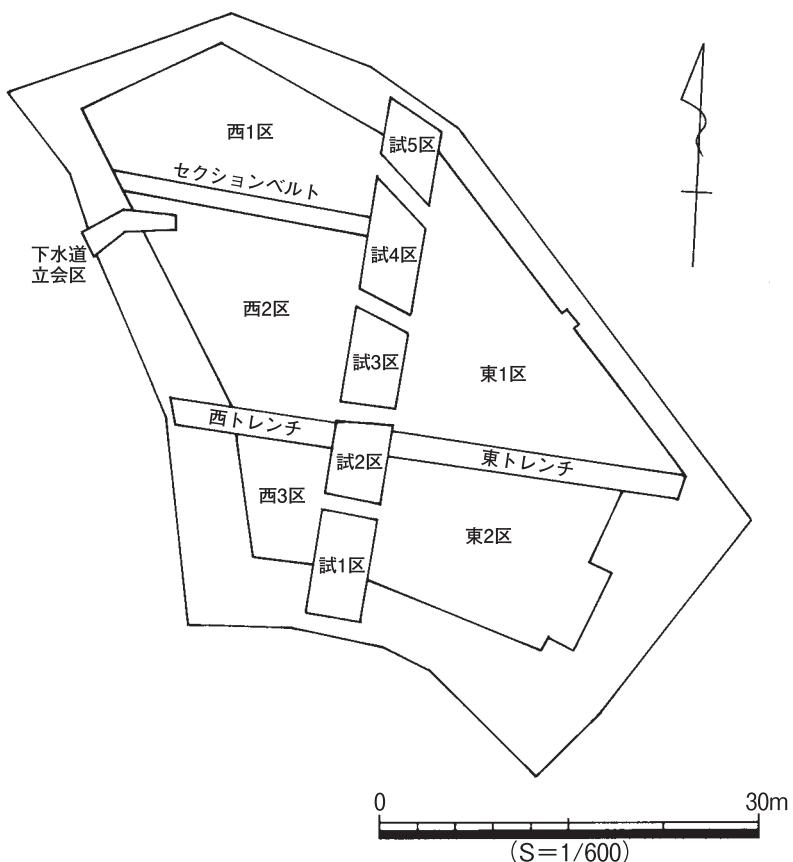


図5 本発掘調査区

は、東西トレンチより南に排土を置いて、その北側(西1, 2区、試掘3～5区、東1区)の調査を行い、後半は、北側に排土を再び戻した上で、改めて南側(西3区、試掘1, 2区、東2区)の調査を行うという手間がかかった。

**グリッド** 弥勒寺遺跡群の調査は、弥勒寺跡の塔と金堂の間に設置された指定区域の基準点(第7系 X=-55135.400m、Y=-24621.210m<sup>\*1</sup>)を原点として、それを南北に貫く伽藍の主軸(N-1° 44' -W)<sup>\*2</sup>を基準に座標軸(図3の赤線)を定め、1区が4m方眼のグリッドを設定して行ってきた。今回も、これを踏襲しており、例えば「N 3 W47」は、原点から北へ3区、西へ47区の位置に当たる。これに従えば、弥勒寺西遺跡の弥勒寺遺跡群における位置関係を表現することができる。

東西軸を西へ延長すると、図6の赤線のとおりとなる。例えば、これが貫く「方形の張出し」は、W48～49区に当たることから、「弥勒寺跡の伽藍の中心から真西へ190m前後進んだ位置」であることがわかる。

\*1 世界測地系に換算すると、X=-54786.7912m、Y=-24892.1007mとなる。

\*2 1998年と1999年に実施した弥勒寺跡講堂跡調査で、講堂の主軸がこの主軸より1° 30'ほど東へ振ること、すなわち伽藍の主軸は極めて真北に近いN-14' -Wとなる見通しを得ている。

**試掘調査区** 発掘調査の対象範囲は5段に分かれた棚田であった。南北方向に設けた試掘坑はその段を境として、南から順に1～5区と呼ぶ。また、試2区の北壁を延長して西トレーニチを設けた。

**東・西区** 本発掘調査では、試掘坑をはさんで東西に区を呼び分けた。

東区は、東に延長したトレーニチを境として、その北を東1区、南を東2区とした。

西区は、自然の流路(S X 1)に設けたセクションベルトを境として、その北を西1区、セクションベルトとトレーニチの間を西2区、トレーニチから南を西3区とした。

**前・後半** 発掘に伴う排土を調査区内で処理しなければならず、前半

## 2 主な遺構

かつてこの谷を流れていた3条の自然の流路を検出した。そのうちの2条(S X 1と2)は、調査区内で合流する。この本流ともう1条の支流(S D 1)は、調査区外のさらに下流で合流し、長良川へ注いでいたと思われる。これらの岸辺には、土坑や、あるいは底に礫を詰めたり、曲物や底部を穿孔した甕を埋設した湧水を誘う仕掛け、いわゆる井泉が点在し、井泉からの湧水を流路に導く溝(「導水の溝」)を伴う方形に張り出した岸辺(「方形の張出し」)や、その背後には篝火の跡と掘立柱列(目隠し塀か)があり、閉ざされた空間を形成している。また、この空間に至るためのS D 1を渡る橋(「橋状遺構」)や東側の山際では柱間10尺の大形掘立柱建物の一部を検出した。



前半の調査区

撮影 2002.7.26

## a. 自然流路(S X 1・2), 方形の張出し, 導水の溝(S D 2), 井泉1・3(西1～3区)

**基本層序** 自然の流路に達するまでに、I層(ガマやササダケの根が入り込んだ表土)、II層(地下の茎に鉄分が沈着した痕跡である縦方向の筋が多く入る暗灰色粘質土)、III層(2～10mm大の砂岩礫を多く含む暗灰色～灰白色の粘質土)が1m程の厚さで堆積していた。

自然の流路はR 1～3層に分層した。SX 1と2が合流する地点では、少し複雑な様相を呈し、R 2～2'層まではそれぞれに堆積し、R 2～2'層から上が同一の層となる。検出され始めた段階から多くの遺物を包含し、R 2層に達すると徐々に出土量が減少する。R 3層に達する頃、すなわちR 2層の底に溜まったハツリ屑が多量に出土した。遺物取り上げ時において層の上下で錯誤もあるが、基本的には、R 1・2層が包含する遺物は古代に限られ、R 3層からは若干の縄文土器が出土した。

その下は、IV層(灰白色砂質土)のいわゆる地山である(図8)。

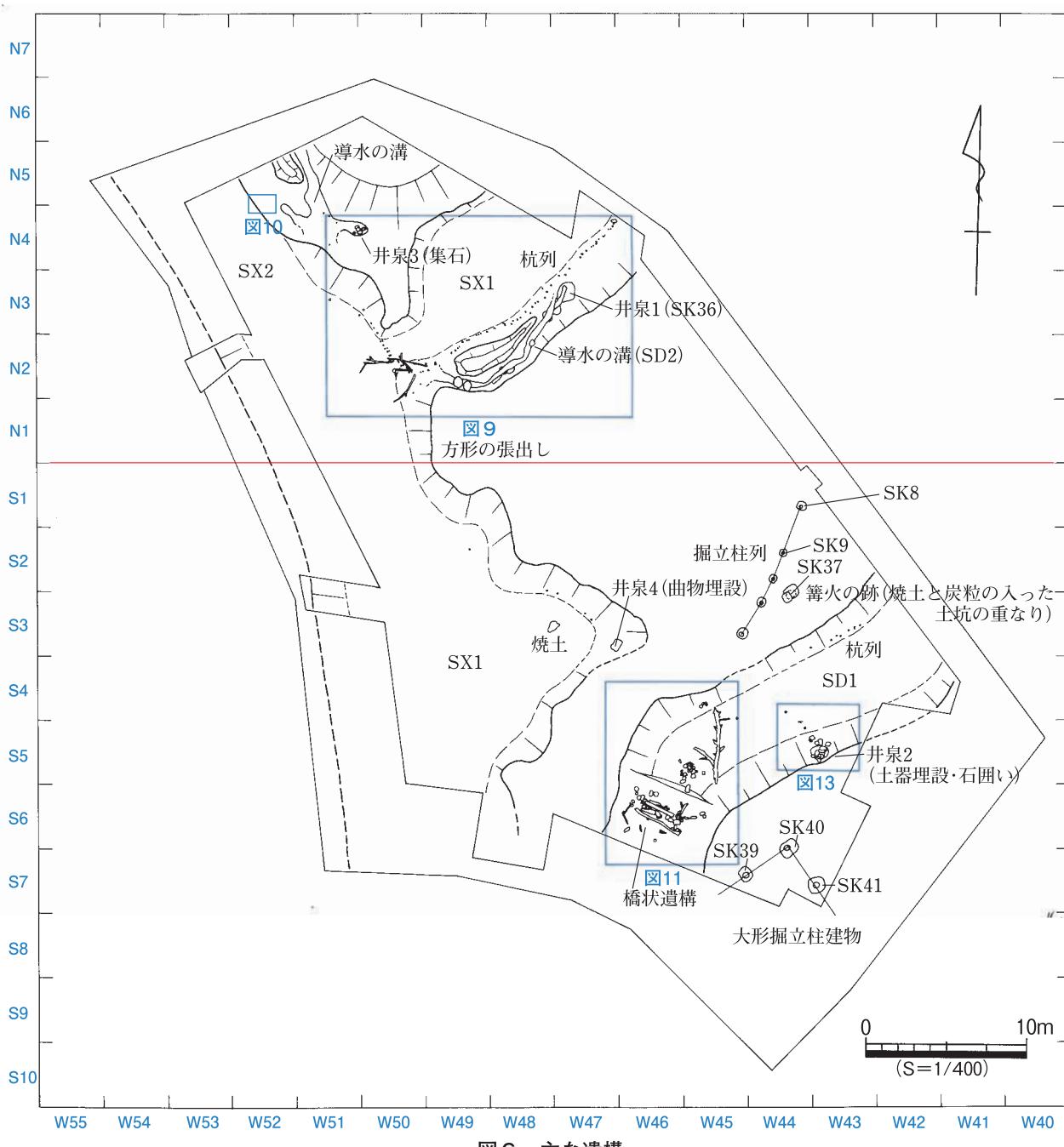


図6 主な遺構

**方形の張出し** S X 1に向かって2m程突出し、先端部で幅約5mで、北側に井泉1(S K36)から続く導水の溝(S D 2)が伴うことによって、水辺に張り出た方形の舞台のように見える。先端部は流路側に土層が下っており、切り土をして整えた様子はない。また、IV層(地山)の上層にアカホヤ火山灰の混入が認められた。この層も岸辺の下がりに沿って堆積していることから、降灰したとき(約6,400年前)には、既に流路(S X 1)が付近の地山を開析していたことがわかる(図8 断面G-H)。



方形の張出し



図7 等高線



A-B (SX2)



C-D (SD1)



E-F (SX1・2 北から)



E-F (SD2拡大 北から)



I-J (SX1 西トレンチ)



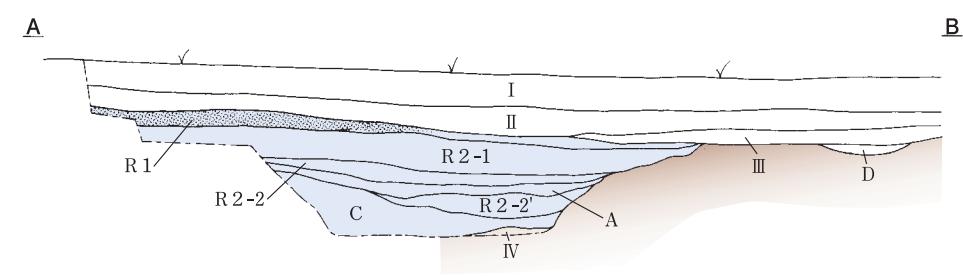
I-J (SD1 東トレンチ)



G-H (方形の張出し)

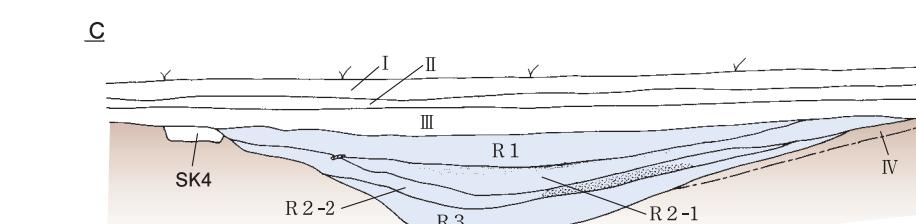


K-L (柱穴列北端 SK8)



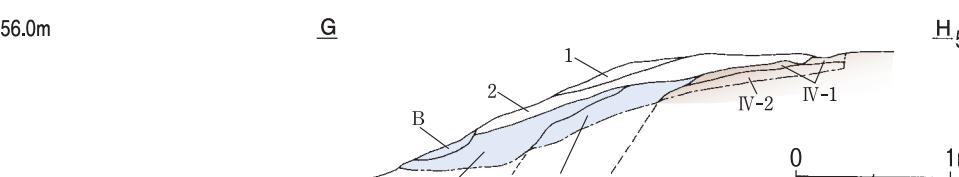
SX2(A-B)断面図 (S=1/100)

- I 茶褐色粘質土 水田耕作土、草の根が多く入り、そこへ沈着した鉄分のシミ(斑)が入る。  
 II 暗灰褐色粘質土 鉄分のシミが斑ではなくて、全体的に広がる。  
 III 暗灰褐色粘質土 II層より黒味を増し、粘性も強い。  
 R 1 暗灰褐色粘質土 III層と色や質はほぼ同じ。この層の西側半分は、山から崩落したバラス状の礫が堆積している。  
 R 2-1 黒褐色粘質土 R 2層を開拓した流路の堆積。  
 R 2-2 黒褐色砂質土 R 2層を開拓した流路の堆積。  
 A 暗褐色土 バラス混じりの灰黄色砂質土の斑が入る。R 2-2層が堆積する過程で、西側の山の崩落の影響を受けて形成された層。  
 R 2-2' 暗褐色砂質土 R 2層を開拓した流路の堆積。  
 C 砂利層 暗青灰色のヘドロ状の粘質土の中にφ 5cmの角礫(青白色のチャート)が密に詰まる。  
 D 暗灰褐色粘質土 溝、こより北に「井泉」の存在が推測される。  
 IV 灰白色砂質土(地山) 地山
- ※この断面では、R 3層の堆積は認められない。



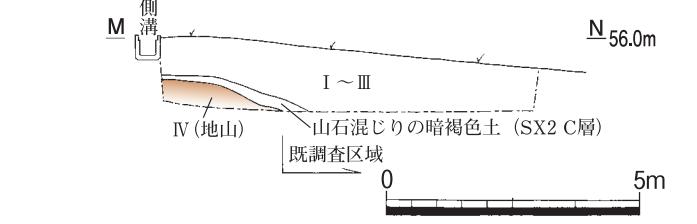
SD1(C-D)断面図 (S=1/100)

- I 茶褐色土 ササダケの根が密に入り込んだ表土層。ここは、畑として利用されていた所。  
 II 暗灰褐色土 II層より黒味を増し、粘性も強い。  
 III 黄褐色土 全体に鉄錆色した層で、西へ行くに連れて明るさを増す。  
 R 1 黒褐色粘質土 下層のSD1に重なる部分が特に縦方向に鉄錆色の筋(地下の茎に鉄分が沈着したもの)が多く入る。  
 R 2-1 黒褐色粘質土 SD1が葦原のような状態の時に形成された層と思われる。  
 R 2-2 黒褐色砂質土 縦方向に鉄錆色の筋が多く入る。  
 R 2-2' 黒褐色粘質土 上部に灰白色的砂が縞状に入る。下部へ行くほど黒味を増し、木片などの植物遺体が多く混じる。  
 R 3 黒色粘土 粒子が細かく、黒光りする。東側に、山の崩落による礫が堆積している。  
 R 4 黑色粘土 下部へ行くほど白味を帯びた均質な粘土になる。縄文土器が出土した。  
 SK4 暗黄褐色土 炭粒が1cmの厚さで、底部に堆積している。

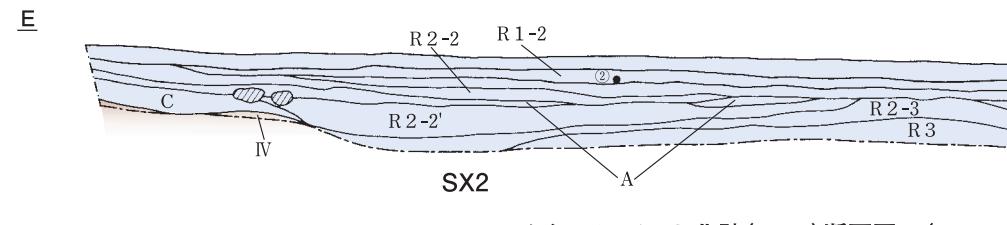


方形の張出し(G-H)断面図 (S=1/50)

- 1 灰色砂質土  
 2 灰白色砂質土(岸辺)から暗茶褐色土(流路内)へ色調と土質が変化する。  
 B 白色砂(護岸の杭列の内側に水の流れができたもの)  
 R 3-1 黒色粘質土  
 R 3-2 黄白色砂質土  
 IV-1 灰白粘質土(IV-1)に黄色砂(アカホヤ火山灰)が混ざる。  
 IV-2 灰白色砂質土(地山)  
 ※アカホヤ火山灰(IV-1)が岸辺の下がりに従って流路に流れ込むような堆積をしていることから、少なくとも降灰した頃(約6,400年前)には、流路(SX1)が付近の地山を開拓していたことがわかる。



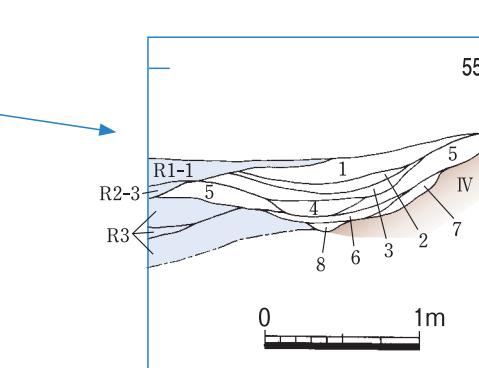
下水道立会区 北壁(M-N)断面図 (S=1/150)



セクションベルト北壁(E-F)断面図 (S=1/100)

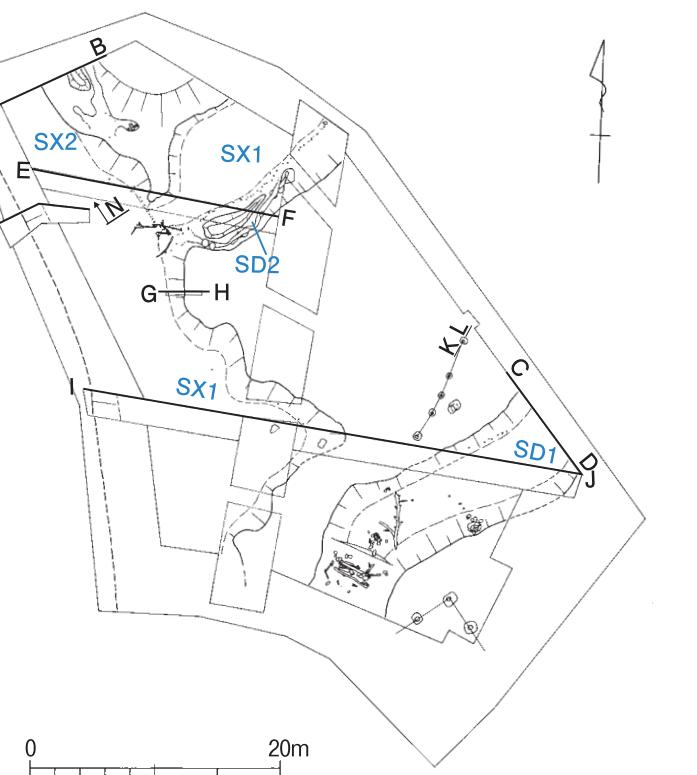
- R 1-1 暗灰褐色土 砂混じりでやや粘質。  
 R 1-2 暗灰褐色土 砂混じりでやや粘質。  
 R 2-1 黒褐色粘質土 黒褐色粘質土  
 R 2-2 黑褐色粘質土 やや砂混じり。  
 A 暗褐色土 バラス混じりの灰黄色砂質土の斑が入る。  
 B 灰白色砂 護岸の杭列の内側に水の流れができたもの。  
 R 2-2' 黑褐色粘質土 やや砂混じり。  
 R 2-3 暗茶褐色粘質土 やや砂混じりで、木材片、草木などの植物遺体が少し混ざる。  
 R 3 暗灰褐色砂質土  
 C 砂利層 暗青灰色のヘドロ状の粘質土の中にφ 5cmの角礫(青白色のチャート)が密に詰まる。  
 IV 灰白色砂質土(地山) 地山
- ※R 2-2層が堆積する過程で、西側から山土やバラスが流れ込み、樹木が倒れ込んでいる。

※①～⑤は、花粉分析試料採取位置。

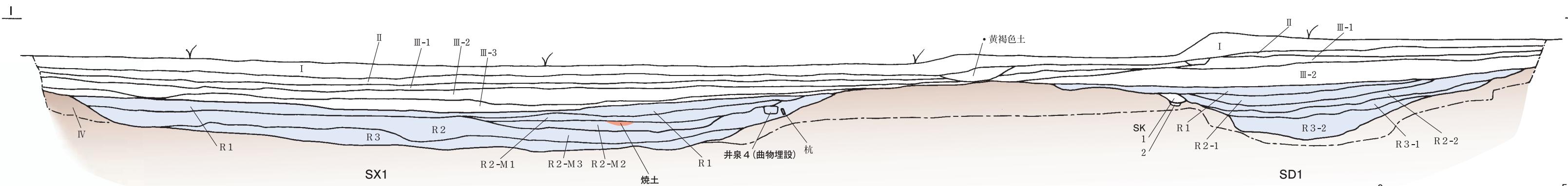


SD2拡大図 (S=1/50)

- 1 暗灰色土 地山由来の灰黄色粘質土のブロックを含む。  
 2 暗茶褐色土 やや粘質で縮り弱。  
 3 暗茶褐色土 木片などの植物遺体を含み、縮り弱。  
 4 暗茶褐色土 3層に比してやや黒味が強く、植物遺体の量は少ない。縮り弱。  
 5 暗灰色粘質土 やや砂質で固く縮まる。地山に似た灰色粘質土のブロックが入る。  
 6 暗茶褐色砂質土  
 7 暗灰色土 地山由来の灰色砂が混じる。  
 8 暗灰色砂質土 井泉から続く溝で、φ 5～10cmの角礫や円礫が混入。導水による初期の堆積と思われる。  
 IV 灰白色砂質土(地山)



断面A～N位置図 (S=1/600)



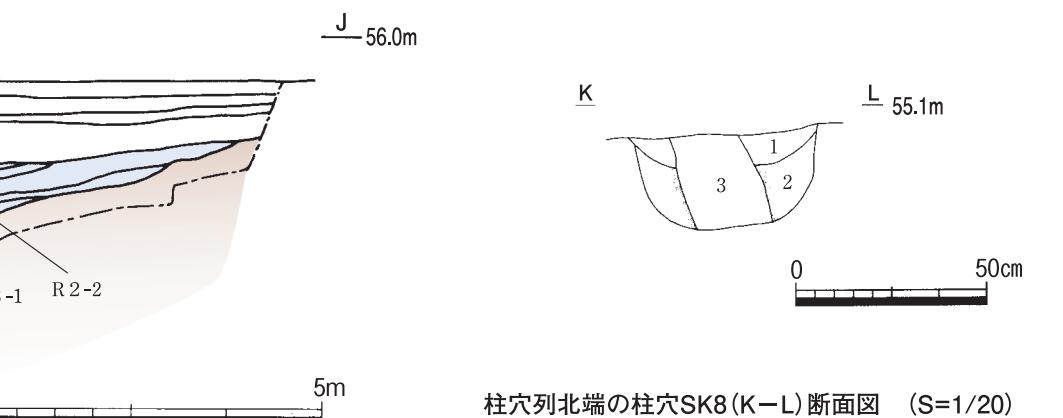
東西トレンチ(I-J)断面図 (S=1/100)

- 基本層序**
- I ガマやササダケの根が入り込んだ表土、層下部で暗灰褐色粘質土。 表土  
 • 黄褐色土 畑を補強した山土で、鉄分のシミが多く入る。
- II 暗灰褐色粘質土 やや緑がある。縦方向に鉄錆色の筋(地下の茎に鉄分が沈着したもの)が多く入る。 繩文～近世の遺物が混入
- III-1 暗灰色粘質土 やや砂混じり、φ 5～10mmの砂岩を多く含む。 古代～中世の遺物が混入
- III-2 灰白色粘質土 やや砂混じり。
- III-3 灰白色粘質土 やや砂混じり、φ 2～3cmの礫を多く含む。 自然流路内の堆積 古代
- R 1 暗灰褐色土  
 R 2 黑褐色粘質土  
 R 3 暗灰褐色砂質土  
 IV 灰白色砂質土(地山)

- SX1**
- R 1 暗灰褐色土 砂混じりでやや粘質。  
 R 2-M1 黑褐色粘質土 R 2層を開拓した流路の堆積。  
 R 2-M2 暗褐色粘質土 R 2層を開拓した流路の堆積、灰白色の横筋が無数に入る。  
 R 2-M3 R 2層の最下部 M層掘下げの過程では、この部分をM3層として認識していたが、最終的には西側のR 2層と一連の層であることが判明した。
- SK**
- 1 灰白色粘土(地山由来)と黒色粘質土(R 3-1に似た土)の斑  
 2 黑褐色土 やや砂質

- SD1**
- R 1 SX1のR 1とR 2-M1に相当する。  
 R 2-1 SX1のR 2-M2に相当する。  
 R 2-2 SX1のR 2-M3に相当する。  
 R 3-1 黑褐色粘質土  
 R 3-2 黑褐色粘質土で、下位へ行くに連れ、灰色を増す。

図8 断面図



柱穴列北端の柱穴SK8(K-L)断面図 (S=1/20)

- 1 茶褐色土 砂質、φ 5mmの鉄分の斑が入る。  
 2 茶褐色土 やや粘性を帯び、よく縮まる。  
 3 茶褐色土 φ 1～2mmの砂粒が混入し、地山由来の黄褐色砂質土の斑が入る。  
 (柱痕跡) 柱痕跡の外側で、2層の範囲に鉄分が浸み出している。

**井泉 1 (S K36)** 長径1.3m、短径1.1mの土坑である(図9)。発掘調査中、どこを掘っても掘ったところから水が湧くため困難を極めたが、同時にここでは土坑により湧水を誘うことができるこことを身をもって知った。この土坑は、そうした仕掛けである井泉と思われる。湧き出た水は、溝(S D 2)が導き、方形の張出しに沿って流れて本流(S X 1)に注いでいたと思われる。

S K36からは、墨書き土器の「安…/如…」(図26 76)、「池」(図30 111)や、高台付き坏身(図68 23～26)などが出土した。そのうち、(23, 24)は灯明として使用されたものである。

**導水の溝(S D 2)** S K36からS X 1までの延長約10mの溝をS D 2と呼ぶ。方形の張出しに沿い、長さ6m、最大幅1.6mの島状の高まりが伴う。この高まりは、溝の掘削により岸辺から切り離された後、その土で高さが補われていた(図8 断面E-F S D 2 拡大図 5層)。その高まりとの間で溝の幅を測ると、広いところで1.5m、狭いところで1.2mとなる。しかし、底に幅20cm前後、深さ数cmの砂が堆積した層があり、これが水の流れを反映していると思われる(同図 8層)。山水が増している時季は別として、井泉から水を湧き出させたときだけ、その分の水が流れる程度が常態であったと思われる。

S K36に湧く水が、そこから溢れて蕩々と流れかどりについても疑問である。8層によって把握できる水の流れは、S K36の内部から發しており、溝を切って流れを整えた様子がうかがえる。また、S D 2の底を精査したところ、その流れを切ったり、逆に流れに埋もれている土坑がいくつかあることに気がついた。これらの穴も湧水を誘った痕と考えられる。つまり、湧水点とその流れにおいて行う行為は、その時々に定めた溝沿いの任意の場所を掘って行われ、しかもその長さは1～2m程の短かくて、意外に狭い範囲だったのではないかと思われる。S D 2は、こうした単位が集積した姿もある。S K36も、渴水期に湧水を誘った穴の一つであったとすると、さらに上流の岸辺沿いにも、同じような井泉が点在する可能性を考えておきたい。



井泉 1 (S K36) と導水の溝(S D 2)



井泉 1 (S K36) と導水の溝(S D 2)



導水の溝(S D 2)



護岸の杭列とその内側にできた溝(試5区)



堰状の杭列(S D 1の出口付近)

状の高まりの上から回りこませて、S D 2に流れを生じさせたと考えられる。

このように、S D 2及びその周辺では、「水の流れ」を確保しようとした工夫が看取できる。

S D 2からは、この溝での行為が頻繁であったことを物語る多くの遺物が出土した。特に、墨書土器が集中し、S K 36から出土した2点と接合するものを含め、「寺」(12)、「廣万呂」(54)、「南(榮)」(65)、「巳人/巳人/巳人」(60)など、合計20点の墨書土器が出土した(表3)。そのほか多数の須恵器が出土したが、転用硯や灯明として使用されたものが多いことが特徴である(図68)。これに対して木製品は、燃えさしなどが12点出土したのみであり、この溝にとどまる、あるいは、とどめることがなかったとみられる。



井泉3(集石)

**護岸の杭列** 嶼密には「岸辺を護るように打たれた杭列」であり、その役割については不明である。S X 1では、S D 2付近で最も顕著に見られた。島状の高まりの外側を廻り、その列の内側に水の流れができて砂が溝状に堆積していた(図8 断面E-F B層、図9)。少なくともこの部分では、井泉からの湧き水の通り道を確保し、岸辺を廻るその流れが本流に逃げないようにする役割があったとみられる。S K 36から50cm出たところの溝を切り替えた痕跡は、この流れから取水しようとしたものである。

また、S X 1と2が合流する地点で、S X 1側の流れを堰き止める杭列が検出された。下流側に膨らみ、弧を描いている。S D 2の水の出口より少し上の位置である。堰としての構造は明らかではないが、杭は2本一対で打たれており、付近に散乱していた木の枝や棒、板などが固定されていたと思われる。ここで堰き止めて水位を増し、島

**井泉3** 径80cm程のやや方形を呈する土坑である。円礫と角礫が底に詰められていた。礫群は、湧き出る水を清浄に保つために入れられたものとみられ、水を土坑の外へ導く溝とつながっている(図9)。これと同じ井泉が西側にもあったことが、溝の形から看取できた(図6)。S D 2と同じように、島状の高まりが伴い、北西側から流れるこの溝の先に、井泉が存在することが予想される。

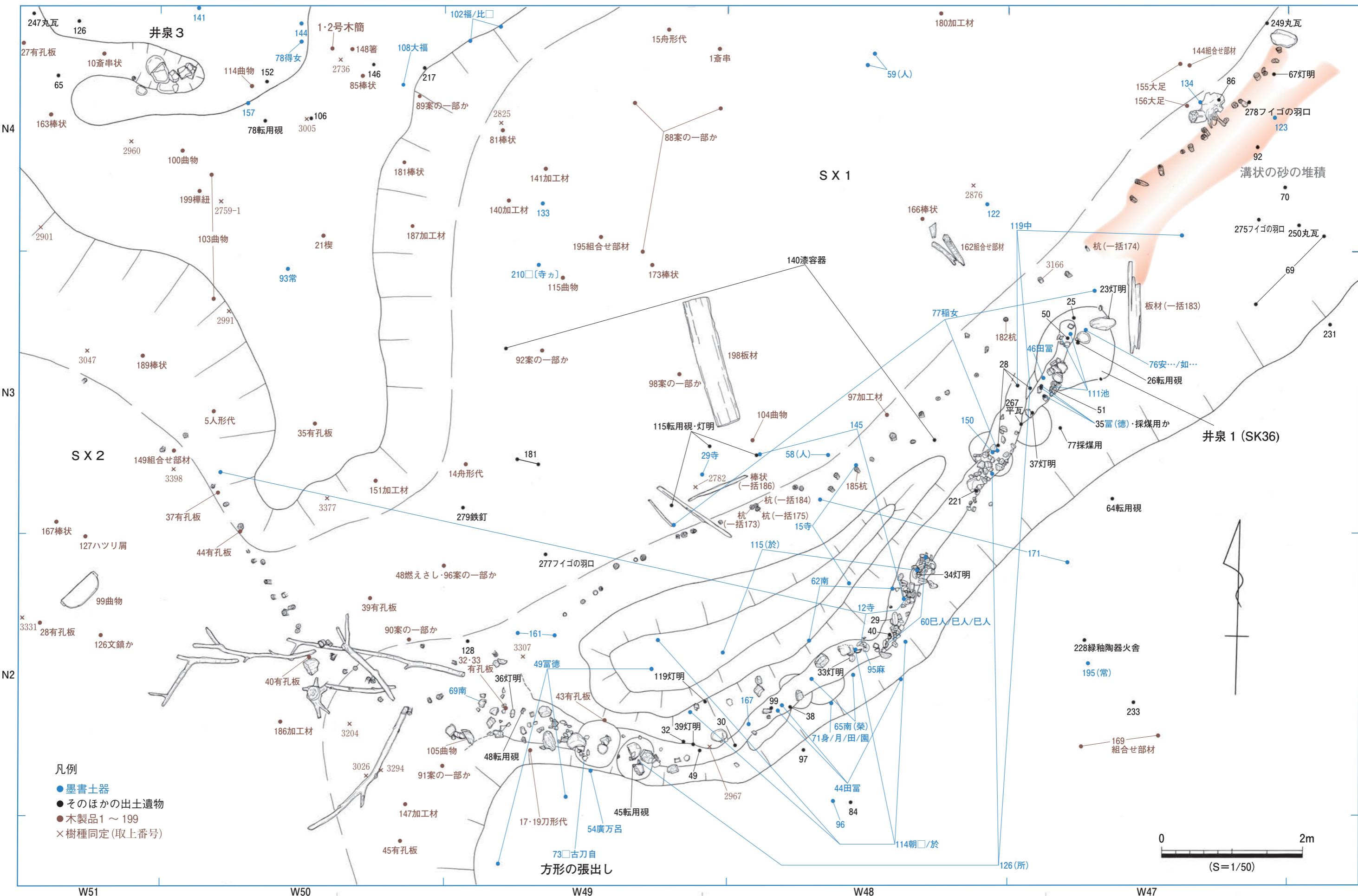


図9 導水の溝(SD2)

**人形代等一括出土地点** S X 2 の岸辺(西1区)で、人形代などがまとまって出土した(図10)。人形代のほか、木簡状木製品など合わせて9点である。我々を驚かせたのは、人形代(3,4)や板片(11)、木簡状(8)、板状(取上番号2865)などの木製品が、地面に列をなして突き刺さった状態で検出されたことである。流土に少し押し流されてはいるものの、ほぼ元位置とみられ、まさにこの場所で行われた祭祀を彷彿とさせる。

一般に、人形代は水に流すもの、斎串は地面に突き刺して結界を示すものとされ、我々はそうした固定観念にとらわれていた。ここで得られたことは重要であり、木簡状の木製品なども人形代、斎串のような使われ方をした、あるいは代用されたこと、すなわち、木簡状や木札状の木製品も人形代、斎串の形を備えていなくても祭祀具として扱われたことを示唆している。発見された「祭祀具」とわかる木製品は人形代、斎串のほかは、舟形代、刀形代のみであり、種類と数が極めて限られている。しかし、それら以外の木製品も、この谷で発見されることに意味があり、一つもおろそかにできないという教訓を得たのである。

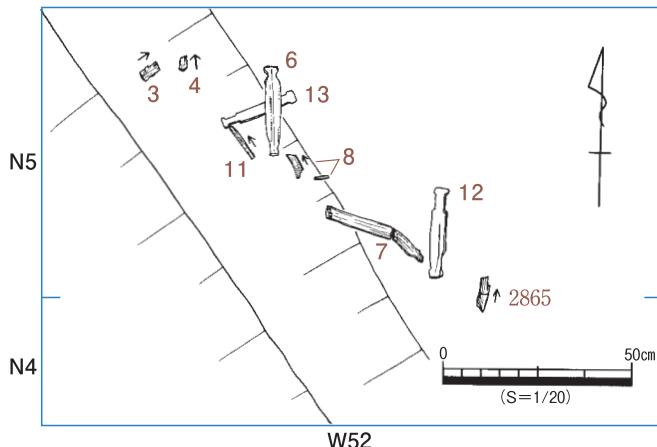


図10 人形代等一括出土状況



人形代等一括出土(北から)

#### b. 掘立柱列、篝火の跡、井泉4〈東1区〉

**掘立柱列** 方形の張出しの背後の東1区S 1～3 W44で、掘立柱の柱穴列を検出した(図6)。両端の柱穴の心々で延長8.8m、柱穴は5つ(4間分)で、中程で少し屈曲して東側に膨らんでいる。柱間は一定せず、南から順に2.3m、1.7m、1.8m、3.0mを測る。北端の柱穴(S K 8)から、北へ2m程調査区を拡張したが、同様の柱穴は検出されなかった。しかし、これより先に柱列が伸びる可能性は否定できない。5つの柱穴のうち、SK 8を南北方向で断ち割り、明瞭な柱痕跡を断面でも確認した(図8 断面K-L)。

柵か塀であったことは間違いないが、ここに設けられた理由、機能を考えるとき、やはりここで行われていたこと、すなわち祭祀と関連づけなければ理解できないだろう。この柱列から西の方形の張出しまでは遺構が全くない空閑地である。掘立柱の列は、弧を描いてこの広場を囲い込み、内と外を区別して、中の空間に意味を持たせていたと考えられる。つまり、祭祀空間を画するための施設と考えるのが、現状では最も自然な解釈である。

**篝火の跡** 堀立柱列の南端から2つ目と3つ目の柱穴の東側、東1区S 2～3 W44で、SK37を中心とする径1.8mほどの範囲に、重なり合う土坑群を検出した(図6)。土坑の覆土には、それぞれ炭



掘立柱列と篝火の跡(南から)

粒が多量に混入することから、篝火の跡と思われる。おそらく、こぼれ落ちる炭を受けるために、予め下を浅く掘りくぼめておいたもので、篝火を設置する場所が定められていたために、同じ行為が同じ場所で何度も繰り返された結果、一箇所で切り合う遺構として残ったものと思われる。その位置が、堀立柱列によって画された広場の外である点に注目したい。祭祀の空間は、暗闇を旨としたのではないかと考えられるからである。

**井泉4** 東トレンチの掘り下げ中に、SX1の東岸の下がり端、S 3 W46～47で、R2層中から隅丸方形の曲物が出土した。長辺72cm、短辺50cm、深さ20cm程の大きなもので、トレンチ北壁で堀方が確認できる(図8 断面I-J)。検出中は黒褐色粘質土に支えられ、かろうじて形をとどめていたが、



曲物出土状況(東トレンチ)

傷みがひどく、取上げた途端に崩壊し、その状態で水中保管に甘んじて久しい。保存処理にも堪えない状態であったため、写真が元の形を伝える唯一の資料である。

トレンチの壁に残された蓋か底板を取り上げたが、遺存状態は同様で、写真に見るとおり、縁部の丸みが、曲物の形を反映していると思われる。

R2層上面から穿たれた井泉の一つで、曲物による演出と考えられる。



埋設堀方(東トレンチ北壁)



蓋か底板(取上げ直後)

**焼土** 井泉4から西に4m離れたS 3 W47～48で、焼土堆を検出した。長径84cm、短径55cmの範囲に焼土と炭が堆積し、半裁の結果、深さは中央部で2cm程であった。流路の堆積過程(R 2-M 2層の上面)における営為によるもので、その上のR 2-M 1層が井泉4とこの焼土の堆積を覆っている。層位的に同時性が認められることから、両者が相互に関連して存在していた可能性もある。



焼土(北から)

c. 自然流路(S D 1), 大形掘立柱建物, 橋状遺構,  
井泉2(東2区)

自然の流路S D 1は、東1区から2区にかけて、幅約8m、延長22m程が検出された支流で、少し下流の発掘区外で本流S X 1に合流すると思われる。護岸の杭列が、東1区の西岸に見られた。



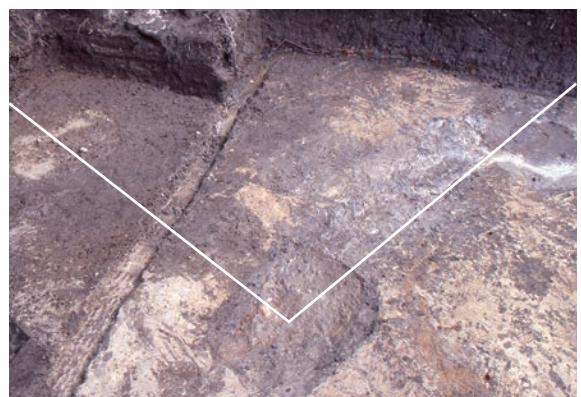
後半の調査区(西から)

**大形掘立柱建物** S D 1の東岸、東2区S 7 W44～45の山際に、柱穴と思われる隅丸方形のS K39と40を検出した(図6)。還元状態の粘質土中で、土の色を見極めることができ非常に困難であったが、S K39は、長辺90cm、短辺76cmを測り、径36cmの柱痕跡が確認できた。S K40は、長辺112cm、短辺92cmを測り、柱痕跡の径はS K39と同じ36cmで、2つの柱間は柱痕跡の心々で3.04mを測る。



S D 1 杭列(北から)

柱穴を結ぶ線は、南北軸からおよそ45°振れ、西の谷側へは展開しないことから、東の山側へ調査区を2m程拡張して、これらに連なる柱穴の有無を探った。これにより、S K40から直角に折れた位置でもう1つの柱穴S K41を発見した。長辺104cm、短辺95cmで、径35cmの柱痕跡がある。柱間は、S K40から、心々で2.95mを測る。



大形掘立柱建物(東2区 拡張区)

弥勒寺東遺跡で見られるような、10尺等間の大形掘立柱建物が想定できる。柱穴の痕跡が失われることをおそれて、段を付けた掘り方は行わず、検出した状態で記録し、埋め戻した。

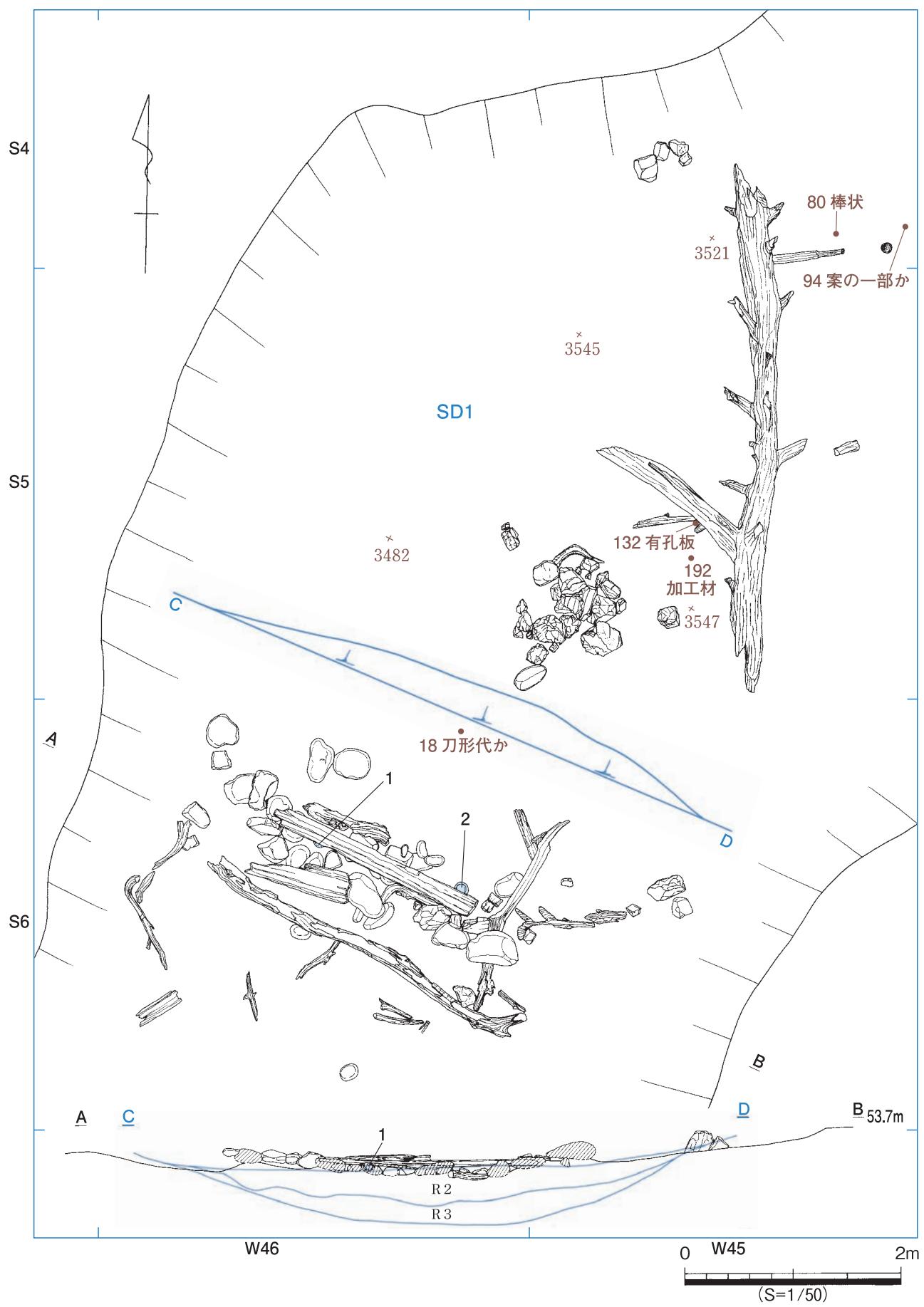


図11 橋状遺構

**橋状遺構** 東2区の南端S6W45～46で、SD1を横断する橋状の遺構を検出した(図11)。R2層上に、両手で抱えられる程の径20～30cmの扁平な川原石が、流路に対して直角に並べられ、その上に幅が18cm、長さ2.1mの板が載せられている。いわゆる道板とみられ、石は板の沈み込みを抑えている。この石の列から外れた80cm程下流側にも、径10cm程で、長さ3.3mの木材がこれに並行して架けられている。この木材は、両岸の斜面に直接持たせていたと見られ、これとの間に横板が渡されていたことも想定できるが、構造としては甚だ不安定なものである。

この上流に、径約30cm、長さ4.9mのアカマツ(表7 176 樹73)が、流路を塞ぐ形で横たわっていた。表皮が残り、樹種同定の結果を待たなくても「マツ」とわかった。枝もそのままで、特に加工された痕も見られない。この場所に投入された意味は定かではないが、流路に水かさがある時は、その勢いの緩衝に一役買ったことが想像される。

この横たわるマツ材と橋状遺構の間に山石の集石が見られたが、堀方は伴わず、井泉とは判断されなかった。

橋状遺構の川原石の間から、2点の須恵器が出土した(図12 1,2)。水の流れに翻弄されることなく、この場にとどまっていたもので、(1)は高台付きの壊身、(2)は高台付きの壊身か、あるいは盤である。



橋状遺構(北東から)



橋状遺構と流路に横たわるアカマツ

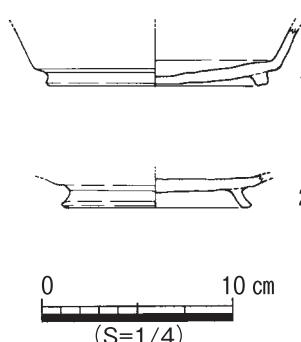


図12 橋状遺構に伴う出土遺物

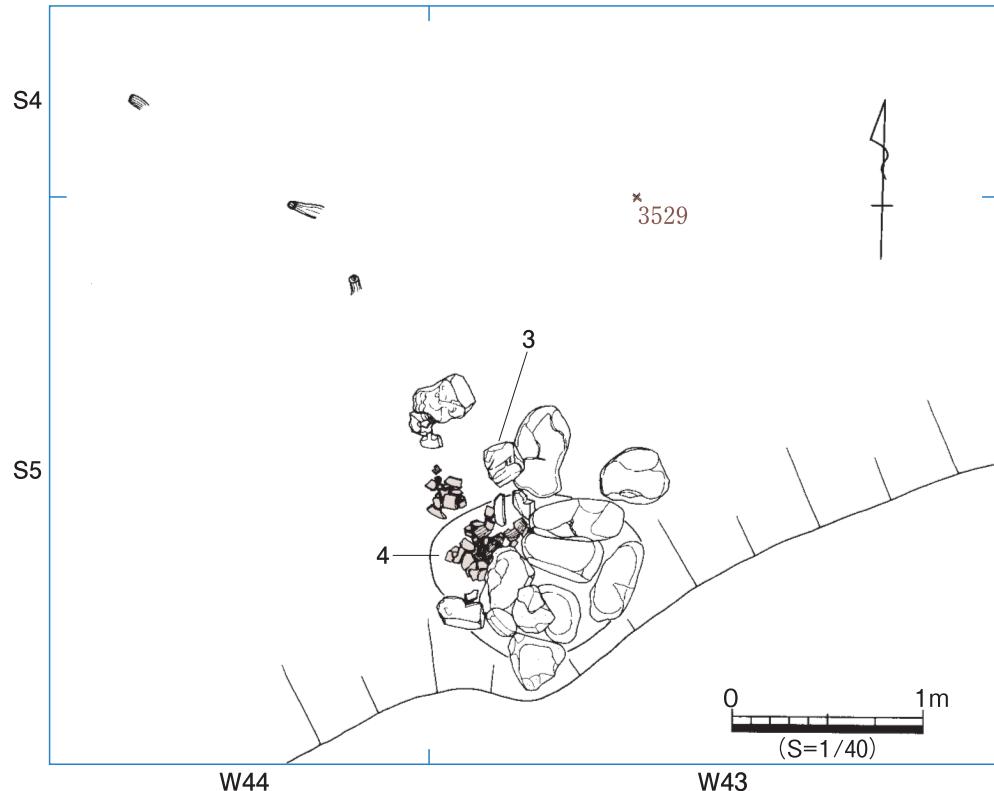


図13 井泉2(土器埋設・石囲い)

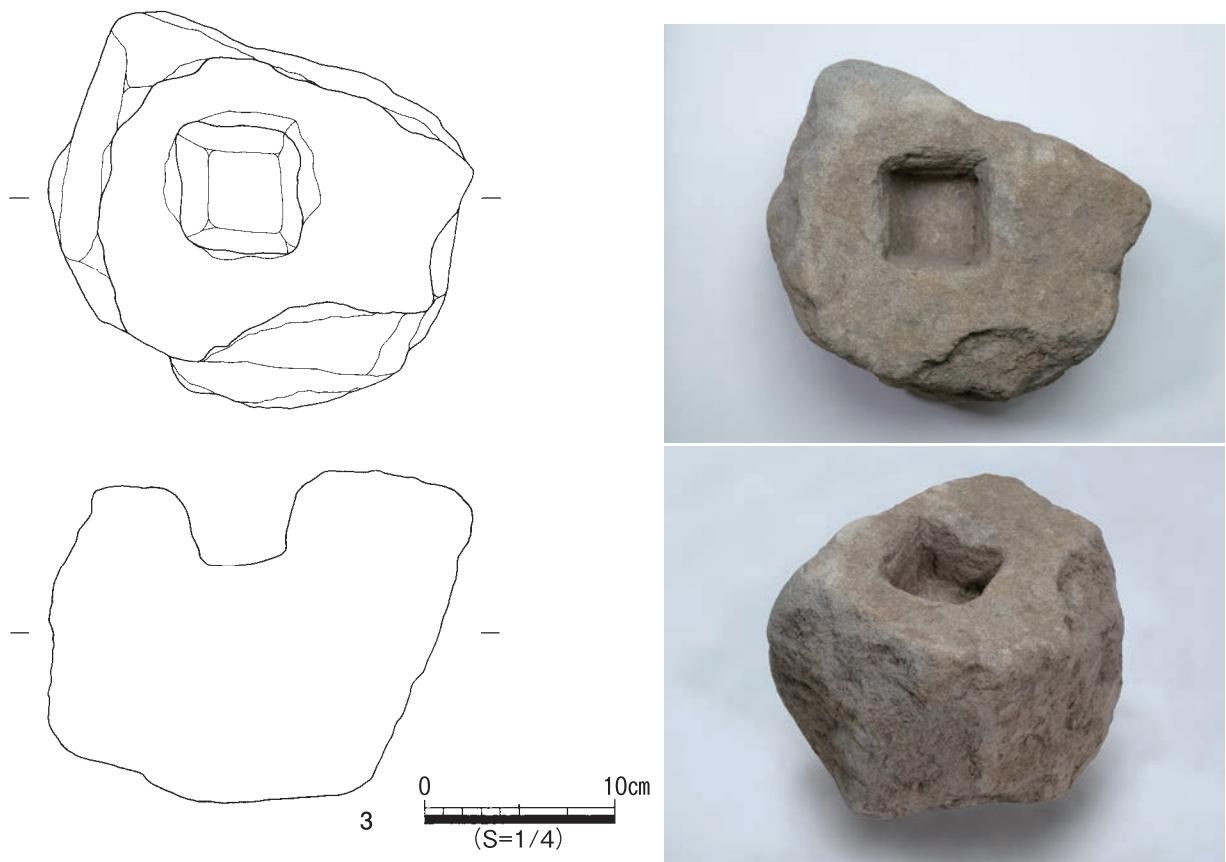


図14 井泉2に伴う出土遺物(1)

**井泉2** SD1の東岸 S 5 W43。土師器の破片が散乱し、その周りを人頭大の石が囲む(図13)。精査の結果、長径110cm、短径90cmの堀方が伴うことがわかった。石の中に加工が施された砂岩礫(3)があった。本来の用途から離れた二次利用と思われる。出土した土師器(4)は長胴甕で、復元してみると底部の破片が見あたらない。おそらく、予め底部を穿孔した甕を埋設して石で囲み、そこから水が湧き出るように見せた演出と思われる。



井泉2(土器埋設・石囲い)

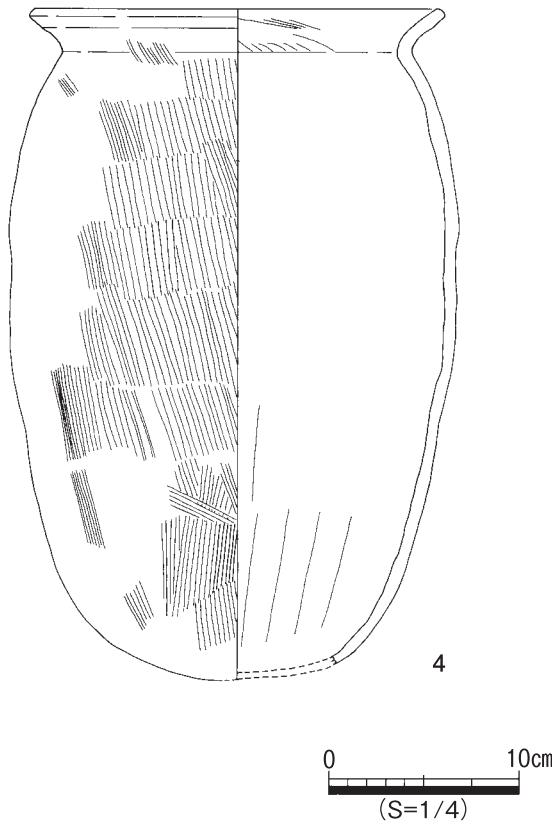


図15 井泉2に伴う出土遺物(2)

表1 橋状遺構・井泉2に伴う出土遺物

図版・番号	器種	出土地点・層位	取上番号		残存の程度	用途等	備考
			取上番号	一括取上番号			
須恵器以外は明記、「坏身」はすべて高台付き							
12 1	坏身	東2区 SD1-R1 (橋の下)	3538		底部のみ残存		R 2層上面
12 2	坏身か盤	東2区 SD1-R1 (橋の下)	3537		底部のみ 1/2 残存		〃
14 3	石材	東2区 SD1-R1(井泉遺構)	3541			井泉の石闇	砂岩、23.0 × 17.5 × 17.5cm、ほぞ穴の ような一辺7.0 × 深さ4.5・底面で一辺 4.5cmの方形の穴が穿たれている。
15 4	土師器 長胴甕	東2区 SD1-R1(井泉遺構)		167	口縁 1/4 残存 底部欠損		外面ハケ、内面ヘラケズリ。口縁部に 微かな段を有し、端部は面取り。

## d. そのほかの遺構



方形の張出し上の土坑群(西から)

**方形の張出し上の土坑群** 導水の溝(S D 2)の出口に近い方形の張出しの先端、西2区N1～2 W49の土坑群(S K15～24)。径2m程の範囲に集中し、切り合いが著しい。径50cm内外で、深さが5cmから、深くても10cmの窪みであり、特に遺物は伴わない。湧水を誘うために、同じ場所で繰り返し穿たれた井泉であった可能性も考えられる。



図16 そのほかの遺構

**S X 1 東岸の柱穴群** 試掘 1 区 S 5 W48 の岸辺に、柱穴と思われる S K53, 54, 62, 63 がある(図16)。径 60cm 内外の鈍い方形で、明瞭な柱痕跡が認められる。S K53, 54, 62 は直線上に並び、柱間は柱痕跡の心々で 1.2m と等しい。S K63 は、S K62 に添うようにあり、柱痕跡の心々では 50cm、堀方は 20cm ほどしか離れていない。これらに関連する柱穴は周囲になく、建物の一部ではないことは確かだが、機能については未詳である。



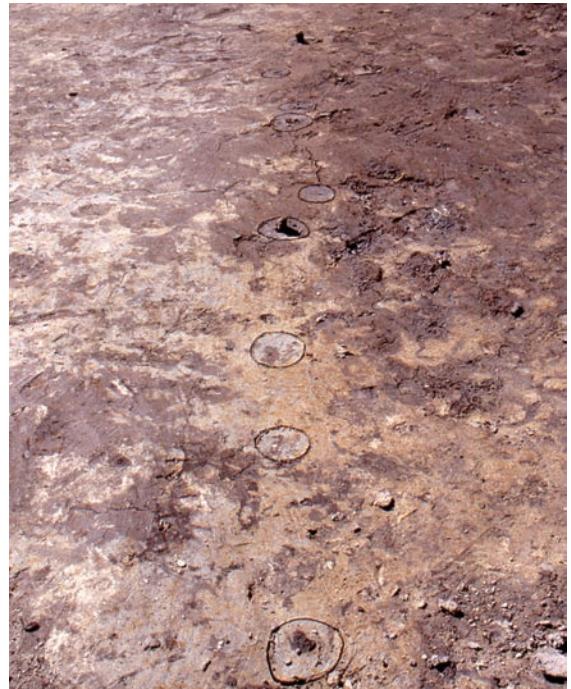
岸辺の柱穴群

なお、S K54 から暗文が施された土師器坏の細片が出土した(図81 232)。

**S K26 ~ 28 東 1 区 N 1 ~ 2 W45 の土坑群。**これらも 2.5m の間隔で直線上に並ぶ。しかし、発掘調査区の範囲においては、建物は想定し難く、時期も未詳。これらを見極めるためには、もう少し周辺の情報が必要である。

**小区画水田の復元** 東 1 区の S X 1 と S D 1 にはさまれた陸地部分では、20 ~ 40cm の間隔で打たれた杭列が広範囲に検出された(図16 茶色)。杭そのものが残っているものや、杭の周りが粘土化して灰白色に変色した径 15cm 程の痕跡の列である。灰白色の痕跡が隅丸方形を呈するものや、中心に杭の先が暗褐色の四角い痕跡として観察できるものがあった。一様に 4 面で尖らせた杭が用いられていたと考えられる。

杭列は等高線に沿って、水平距離で 5 ~ 6 m の間隔を空けて上下に 2 列あり、杭が途切れる箇所が、等高線の接線に対して直角方向(水が流れる方向)で一致するように見える。これらは水田の畦畔を反映していると思われた。



試みに、杭は畦畔の谷側に打たれていたと想定し、列が途切れる幅で水路を復元してみると、一辺が 5 ~ 8 m の不整形な小区画水田が浮かび上がる。これを見ると、それぞれの区画が水路に接していることがわかる。水に苦戦した調査中の経験から、この構造は増水時の排水が主な目的であると直感した。湿潤なこの谷の、中世以降の利用の姿と考えられる。



陸地の杭列